

# ブダペスト通信

盛田 常夫



2023年 NO. 10

4月12日

## スキージャンプ 2022/2023 シーズン概観

冬季スポーツのなかで、世界のスキーマルペン競技から日本人選手は消えてしまった。これまでも活躍できるのは回転競技だけに限られ、スーパーGや滑降に出場できる日本人選手はいなかった。ヨーロッパのスキー場のような高低差のあるスピードが出るスキー場がない日本では、スピード系の競技に出場できる選手が育たない。これにたいして、ノルディック競技の複合やスキージャンプには常に世界のトップと競える日本人選手が存在してきた。しかし、その競技人口の薄さから、日本人選手は常に孤軍奮闘を強いられる。

2023年4月12日

これら伝統的競技での苦戦とは対照的に、モーグル、フリースタイル（スキー、スノーボード）などの新しい競技には、複数の日本人選手が第一線で活躍している。これらの競技には遊びの要素があり、大規模な施設やコースがなくても手軽に楽しめるからか、アルペン競技やノルディック競技に比べて、選手層が厚い。北米ではプロ競技にもなっているので、個人参加ができる点も、他のスキー競技と異なる。ガチでハードな競技から若者が離れていることを象徴しているかのようだ。

スキー競技のなかで、ジャンプだけは特別な競技のように感じる。命綱をつけずに、時速 90km~100km のスピードでジャンプ台を飛び出すのを見るたびに、よくこんな競技ができるものだと感心する。子供のころから徐々に慣れ親しんでいるとはいえ、HS（ヒルサイズ=これ以上飛ぶと危険な距離）240m のジャンプ台は、選手でも躊躇するようだ。このフライング競技が得意だった葛西選手ですら、フライングジャンプ台に立つ時にはそれなりの恐怖心があると語っていた\*。

\* ジャンプ台の大きさによって、3種類の競技が行われている。NH（ノーマルヒテル）のジャンプ台のHSは85-109m、LH（ラージヒル）のジャンプ台のHSは110m以上、Sky Flying Hill（スキーフライング）台のHSは185m以上と規定されている。ノルウェイのヴィケルスンやスロヴェニアのプラニツァのフライング台のHSは240mで、前者の台の最長記録（世界記録）はクラフトの253.5m、後者の最長記録は小林の252mである。なお、女子競技では踏切のスピードを維持するために、男子より高いスタート地点から出発するので、どの台でも男子と比較することはできない。男子はLHが、女子ではNHが標準的な競技台になっている。

## スキージャンプの記録

伝統的に日本はスキージャンプの世界的な選手を輩出してきた。札幌五輪時代の笠谷幸生、長野五輪時代の船木和喜、葛西紀明、原田正彦などは世界のスキージャンプの歴史に残る選手である。とくに葛西選手はW杯1988/1989年のシーズンに16歳で初出場を果たした後、最後の出場となった2019/2020年のシーズンまで、実に31年にわたって第一線で活躍した。世界のスキージャンプ界のレジェンドであり、W杯表彰台213回はフィンランドのアホーネンの248回に次ぐ歴代2位である。42歳でW杯優勝、44歳での表彰台は。スキージャンプの歴史に残る快挙である。W杯優勝回数は17勝（歴代19位）である（船木選手は15勝で歴代21位）。

2013/2014 のシーズンに始まった女子スキージャンプでは、高梨沙羅選手が連戦連勝を重ねて、昨シーズンまで W 杯 63 勝をマークして、圧倒的な記録を残している。2022-2023 シーズンで初めて優勝の記録が途絶えたが、女子ジャンプの黎明期に君臨した高梨選手はすでに女子ジャンプの歴史的レジェンドである。女子選手が育っていない時期に圧倒的な力を発揮した記録は、これからも破られることはないだろう。

ヨーロッパでの女子選手育成の結果、毎年、若い選手が次々と輩出され、高梨選手は簡単に勝てなくなった。それでも 10 年にわたって第一線で活躍し、毎年、表彰台に立ってきた記録も、簡単に破られることはないだろう。ただ、11 年続いた W 杯勝利記録は 2022/2023 年のシーズンで途切れた。このシーズンの表彰台は 3 位入賞が 2 度に終わった。

高梨選手に代わって活躍したのが、伊藤有希選手である。今シーズンは最終戦の優勝を含めて 2 勝した。また、女子で初めて実施されたフライング競技（ノルウェイ・ヴィケルスンジャンプ台、HS240m）で、1 回目に 200m を超えるジャンプを披露して 3 位に入賞した。この試合は怪我のリスクを考慮して、上位 15 名の選手だけに参加が許され、スロヴェニアのクリネツ選手が 1 回目に 226m の女子世界新記録を達成した。高梨選手は膝の故障でこの競技への参加を止め、日本からは伊藤選手だけが参加した。1 回目と 2 回目ともに 200m 超えのジャンプを披露したのはクリネツ選手だけで、彼女を除き 200m を超えたジャンプを見せたのは伊藤選手を含め 3 名のみだった。さすがにフライングジャンプ台があるスロヴェニアの選手は強い。

伊藤選手の 3 位入賞が決まった瞬間、外国選手が涙を浮かべる伊藤選手を次々と抱擁するのが印象的だった。女子は現在でも選手層が薄く、史上初のフライング競技を終えた安堵感と勇気を讃える選手同士の友情が垣間見えた。同じ光景は伊藤選手が最終戦で優勝した時にも見られた。

## 日本選手の成績

今シーズンの男子選手は史上最悪のシーズンだった。昨シーズン、主要なタイトルを総なめにした小林陵侷選手はトレーニング不足で、開幕からジャンプ週間までの前半戦でまったく振るわず、札幌大会前までは総合得点 161 得点で 20 位に低迷していた。他

の選手も軒並み小林選手以下の成績で、本選 50 名の枠に入るのも難しく、決勝ラウンド上位 30 名に日本人選手が誰もいない大会もあった。稀にみる日本ジャンプ陣の低迷状態だった。

昨シーズンは W 杯総合優勝だけでなく、ジャンプ週間 2 度目の優勝、五輪ノーマルヒル金メダル、高額の賞金獲得など話題をさらった小林選手だが、祝勝会などの行事が続き、夏のトレーニングが不足した状態でシーズンを迎えた。やはり並外れた才能があっても、トレーニングを積んでフィットネスができていないと、世界のトップと競争するのは難しい。大リーグの大谷選手が並みの選手に真似ができないような生活管理やトレーニングを積んでいる理由が分かる。手抜きした状態で世界の場で戦うことはできない。

小林選手は札幌大会前のザコパネ大会を欠場して一足早く札幌に戻り、大倉山でジャンプを重ねて調整に専念した。これが功を奏して、札幌 3 戦のうち 2 勝した。残りの 1 戦も 2 位で終え、この 3 戦で実に 280 ポイントを稼ぎ、総合得点ランキングが急上昇した。

札幌で復活した小林選手は昨シーズンほどではなかったが、後半戦の大会でトップテンを維持しつつ、3 月末のラハティ大会で今シーズン 3 勝目、通算 W 杯優勝 30 勝を達成した。この W 杯優勝記録は歴代 7 位に相当する。26 歳の若さで、レジェンドの仲間入りを果たした。

最終的に小林選手は W 杯総合得点 5 位の成績で今シーズンを終えた。後半戦の盛り返しは見事だった。シーズン終了後にプロ転向を表明した小林選手の来シーズンの健闘を期待したい。シュリーレンツァウアーの W 杯優勝記録 53 勝を上回るのは難しいが、歴代 3 位の 39 勝は目前にある。

ただ、チームジャパンとしては、団体戦を戦える状態にない。わずかに中村直幹選手が総合 24 位にいるが、他の選手は軒並み 50 位以下の低迷状態だから、チームを組んでも最初から勝負がついている。現在は、同じく後継者不足に苦しむフィンランドとジャンプ先進国最下位の 7-8 位を争うところまで落ちてしまっている。

男子の低迷にたいして、女子は伊藤有希 8 位、高梨沙羅 10 位、丸山希 12 位、勢藤優花 17 位で、今シーズンを終えた。20 位以内に 4 名の選手がそろってれば、団体戦で表彰台を狙うことができる。

### トレーニングの重要性

小林陵侑は大谷翔平選手や佐々木朗希選手と同じく岩手出身である。なぜ岩手から世界で活躍できるアスリートが育つのか。大谷選手や佐々木選手と違い、小林選手は小柄だが並外れた運動神経の持ち主で、岩手のスポーツ少年発掘事業で見出された才能の持ち主である。子供時代にいろいろなスポーツを体験させて、最適な適性を見出す仕組みが働いている。子供の能力を見極め、適切な指導を施すことによって、世界に羽ばたける人材を輩出している。

どのスポーツであれ、世界の第一線で活躍するためには才能とともに、優れた身体能力が不可欠である。次代のテニス界を担うと考えられているアルカラス（スペイン、19 歳）やスィナー（イタリア、21 歳）の身体能力は凄いものがある。アルカラスは 180cm をわずかに超える上背だが、上腕や大腿の筋肉が凄い。スィナー（日本ではシナーと呼んでいるが、この発音は日本の外では通用しない）選手はジュニア時代にスキークアルペン競技でも優れた成績を残し、テニスに進むべきかスキーに進むべきかの選択が迫られた時期があったようだ。並外れた運動神経の持ち主である。外見からは細身でひ弱な感じがするが、身体能力はきわめて高い。これだけの身体能力がないと、世界の舞台で戦うことはできない。

そして何よりも重要なことは、生来の能力に甘んじることなく、日々精進を続けることができることも、世界で戦うための条件である。WBC に参戦した日本の選手は大谷選手の身体能力に驚嘆したが、大谷選手は並みの選手が真似のできないような節制やトレーニングを重ねている。他の選手が二次会三次会の宴会を楽しんでいる時に、一人で黙々とウェイトトレーニングをしていたという話が語られている。天才がこれほど努力しているのに、並みの選手が遊んでいては、いつまで経っても追いつけないのはもちろん、ますます離されていくのは自明の理である。

スポーツの世界だけでなく音楽の世界でも、ワールドクラス、国際クラス、並みのクラスと三つのクラスに選手や芸術家を分類しているが、ワールドクラスと評価される人は生来の能力に加え、それに甘んじないトレーニングを積んでいる。それがワールドクラスと称される世界のトップテンに入る条件である。